

## 平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 教育プログラム及び審査結果の概要

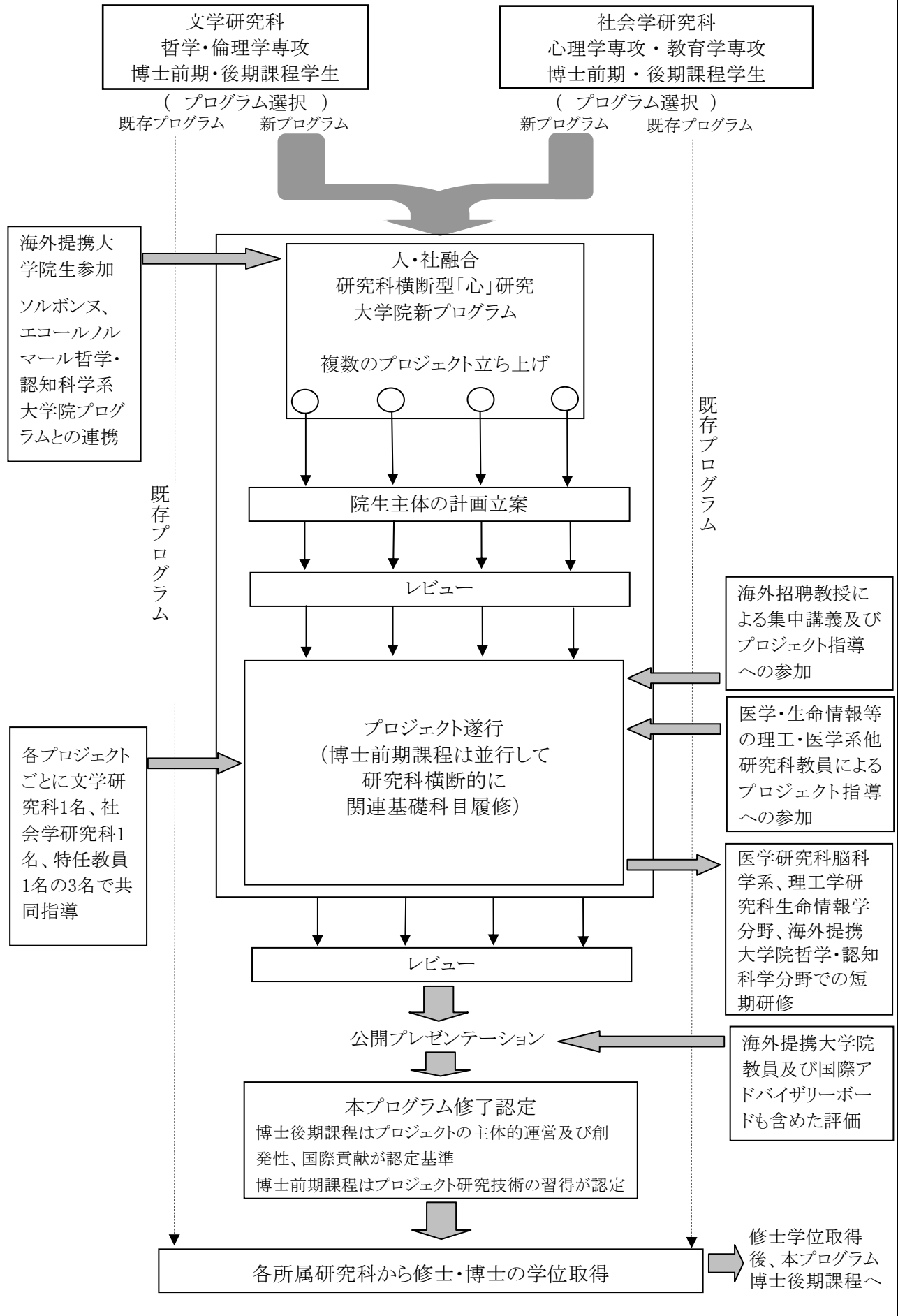
◇「1.申請分野(系)」～「6.履修プロセスの概念図」:大学からの計画調書(平成17年7月現在)を抜粋

<b>機 関 名</b>	慶應義塾大学	<b>整理番号</b>	a025
1. 申請分野(系)	人 社 系		
2. 教育プログラムの名称	心に関する研究科横断プロジェクト型教育		
3. 関連研究分野(分科)  (細目・キーワード)	主なものを左から順番に記入(3つ以内) 哲学、心理学、教育学		
	主なものを左から順番に記入(5つ以内) 哲学・倫理学、実験心理学、神経科学一般、認知科学、心の理論		
4. 研究科・専攻名 及び研究科長名 ( <input type="checkbox"/> )書きで課程区分を記入、 複数の専攻で申請する場合は、 全ての研究科・専攻を記入)	(主たる研究科・専攻名) 文学研究科 哲学・倫理学専攻〔博士前期課程〕 文学研究科 哲学・倫理学専攻〔博士後期課程〕		<b>研究科長(取組代表者)の氏名</b>  関場 武
	(その他関連する研究科・専攻名) 社会学研究科 心理学専攻〔博士前期課程〕、社会学研究科 心理学専攻〔博士後期課程〕 社会学研究科 教育学専攻〔博士前期課程〕、社会学研究科 教育学専攻〔博士後期課程〕		
5. 本事業の全体像			
5-(1) 本事業の大学全体としての位置付け(教育研究活動の充実を図るための支援・措置について)			
<p>慶應義塾では「未来への先導」を基本コンセプトとする21世紀グランドデザインの一つとして「知的価値創造」を掲げている。その目標を実現するために国際連携推進機構、総合研究推進機構という全学的組織を立ち上げて研究教育の質の向上と新しい試みの支援を行ってきている。本取組は既存の大学院研究科の枠組みを越えた学生主体の共同プロジェクト型のプログラムを通じて博士前期課程から博士後期課程まで一貫した国際的レベルの若手研究者育成を目指すものであり、各専門分野の蓄積の上に立ってさらに現代の国際的研究の動向に適合した取組であると考え。大学としても学事・施設面からも全面的に支援していく所存である。</p>			

機 関 名	慶應義塾大学	整理番号	a025
5-(2) これまでの教育研究活動の状況(現在まで行ってきた教育取組について)			
<p>明治年間に開設された本学哲学専攻は大正年間にすでに博士レベルの研究教育を開始し、戦前から博士号を付与した。又戦後の新制大学院制度の開始とともに新制博士・修士課程を開設した。一方においてこのような人文科学系の長い伝統の蓄積の視点を重視し、他方において新たな現代社会のニーズや国際学術界の動向や国際連携に敏感に対応できる人文社会学系大学院の在り方を求めて大学院改革を進めてきた。実際、本プログラムで焦点を当てる「心」研究は哲学・倫理学を中心とした二千数百年の人文科学系研究の歴史があるとともに、近・現代になって心理学・教育学等の社会学系の分野としても独立に発展してきた。又、これら人文系・社会学系の研究蓄積や問題意識に、脳神経科学・生命情報科学等の理系の先端の科学技術を組み入れて「心」研究に取り組む段階に入っている。このような状況において、人文系社会学系を横断し、さらに科学技術系、医学系も視野に入れた新しいタイプの文系主導型文理融合的研究者の育成が課題である。大正期から開始された本哲学専攻の研究者養成の歴史は、心理学専攻や教育学専攻等の社会学研究科や言語文化研究所等を育成し分離独立させた歴史でもあった。これらを今、現代的な視点で本プログラムを通じて統合する新しい重要な局面を迎えたと考える。これまで3年間我々3専攻は(1)文学研究科と社会学研究科の境界を越えた大学院教育制度の提案に向けて、まず両研究科の教員レベルで共同研究パイロットプロジェクトを複数立ち上げ、研究科横断型共同指導の新しいノウハウを蓄積してきた。(2)哲学・倫理学及び認知科学分野の海外提携大学院(パリ第1大ソルボンヌ校及びエコールノルマル)と本分野の大学院共同指導体制について実質的な準備を整えた。(3)脳機能画像研究機器等の最新の脳研究機器の導入や人文・社会学主導の「心」研究のためのそれら機器の利用法のノウハウや要員を人文・社会学研究科内で整備し、ハード・ソフト両面で本プログラム用の教育施設を準備してきた。これらの準備を基に本プログラムの申請に至った。</p>			
5-(3) 魅力ある大学院教育への取組・計画(大学院教育の実質化(教育の課程の組織的展開の強化)のための具体的な教育取組及び意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画について)			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究科の区別や専攻の境界を越えて、哲学・倫理学専攻と心理学専攻を中心として異なる研究科をまたいだ分野横断的プログラムを実現し、「心」の研究に求められているプロジェクト型学際的教育体制を制度面で確立する。特に異なる研究科間の大学院副専攻制度の確立に向けてそのテストケースとなる新プログラムを立ち上げる。プロジェクト型プログラムの導入によって、人文・社会分野における先端的研究動向と人文・社会分野固有の伝統的知識蓄積とを統合して、問題設定、プロジェクト運営、問題解決を計るノウハウを身につけさせ、研究者として自立させる新しいタイプの人文・社会分野大学院教育を実現する。この分野横断的プロジェクト型プログラムが実現すると一方で、例えば、理論的心研究の基礎知識を持つ哲学・倫理学専攻学生が心理学・行動遺伝学・脳機能画像研究等の実験研究に加わるとともに、他方でこれら実験研究の基礎を持つ社会学研究科の心理学・教育学系学生が哲学・倫理学的理論を学習し理論的議論の訓練をつむことが可能となる。</li> <li>2. これまで過去3年間で築き上げてきた国際連携のネットワークを用いて、「心」の研究に関する海外協力校大学院(パリ第1大ソルボンヌ校哲学専攻及びエコールノルマルシューペリール認知科学・哲学専攻)との間での大学院生の共同学位論文指導、共同プロジェクト指導制及び短期相互研修を本プログラムのもとで開始する。</li> <li>3. 本プログラムのプロジェクト型カリキュラムを通じて、参加する大学院学生の学位取得を促進する。(例えば、博士課程学生の博士論文提出数が飛躍的に増加することが期待できる。)</li> <li>4. 総合大学の特徴を生かして、学内理工学研究科・生命システム情報専修や医学研究科脳外科学・精神科学・遺伝子医学分野の大学院と連携し、「心」研究に関わる理工系・医学系の教育者リソースと機材リソースを活用し、科学技術面のプロジェクト指導・短期研修の支援を受ける。</li> </ol>			

機 関 名	慶應義塾大学	整理番号	a025
-------	--------	------	------

6. 履修プロセスの概念図



機 関 名	慶應義塾大学	整理番号	a025
<p data-bbox="165 199 588 230">&lt; 審査結果の概要及び採択理由 &gt;</p> <p data-bbox="165 295 1428 472">「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成に関する教育取組に対し重点的な支援を行うことにより、大学院教育の実質化（教育の課程の組織的な展開の強化）を推進することを目的としています。</p> <p data-bbox="189 490 491 521">本事業の趣旨に照らし、</p> <p data-bbox="189 535 1428 613">①大学院教育の実質化のための具体的な教育取組の方策が確立又は今後展開されることが期待できるものとなっているか</p> <p data-bbox="189 629 1225 660">②意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画となっているか</p> <p data-bbox="165 678 1428 855">の2つの視点に基づき審査を行った結果、当該教育プログラムに係る所見は、大学院教育の実質化のための各項目の方策が、優れており、期待できるとともに、教育プログラムが事業の趣旨に十分適合しており、その実現性も高く、一定の成果と今後の展開も十分期待できると判断され、採択となりました。</p> <p data-bbox="189 871 1206 902">なお、特に優れた点、改善を要する点等については、以下の点があげられます。</p> <p data-bbox="177 967 635 999">〔特に優れた点、改善を要する点等〕</p> <ul data-bbox="165 1014 1428 1332" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="165 1014 1428 1191">・「心」という学際融合的な先端分野に関する研究科横断型の教育プログラムを構築するという発想は独創的な試みであり、魅力ある教育プログラムである。また、その目的に沿って、学際的教育体制を考慮した教育課程が編成されており、これまでの海外提携大学院との交流を取り入れ、実質的な運営が反映されている点も、大きな成果が期待される。</li> <li data-bbox="165 1207 1428 1332">・ただし、研究科間と国際的な連携及び文理の連携という発想は雄大であるが、学生に対し有効な教育を実施するためには、個々の学生の能力・資質に応じた指導・支援を行うことが重要な視点であり、この点について教育プログラムの一層の具体化が必要である。</li> </ul>			